

■「自治会・町内会&NPO 活動おうえんシンポジウム」パネルディスカッション報告

*テーマ:「考えよう! 元気なまちづくりのためにみんなができること」

*コーディネーター:立木 茂雄氏

(同志社大学社会学部教授 京都市地域コミュニティ活性化推進審議会会長)

*パネリスト:

伊豆田 千加氏 (NPO法人子育ては親育て みのりのもり劇場 理事長)

賀川 雅彦氏 (NPO法人京滋マンション管理対策協議会 業務推進プロジェクト事務局長)

片山 博昭氏 (紫竹学区(北区)自治連合会総務)

西田 洋之氏 (NPO法人きょうとNPOセンター 事務局次長)

*総合司会:

笑福亭晃瓶 (KBS 京都ラジオパーソナリティ)

中村 薫 (KBS 京都ラジオパーソナリティ)

立木

本日は、地域の中で“京都の宝”のような4名に集まって頂きまして、それぞれの活動について報告をしていただき、自治会・町内会、そしてNPOなどの地域の力をどうやって高めていったらいいのかということで、議論していこうと思います。

まずは、北区の紫竹学区・自治連合会の総務をされておられます片山博昭さんです。片山さんは、北区の紫竹学区で自治連合会を立ち上げられた方です。どんなきっかけで取組をされるようになったのかということから、お話をいただけたらと思います。

片山

私は、実は九州生まれでございまして、紫竹学区は就職してから住み始めてちょうど 30 年になりますが、ますますこの紫竹が好きになってきていまして、自分のふるさとと同じように誇りが持てるようになってきました。なぜかという、周りの学区と比べたら紫竹学区が非常に元気だということが言えるからだと思います。紫竹学区の位置は、北山通の堀川の交差点から北に行きますと堀川通と鴨川がぶつかるんですが、そのあたりの学区だと思っていただければいいと思います。人口が6,800人余り、世帯数が3,000世帯強でございます。学区の中には、28・29の町内会がございまして、紫竹学区の自治組織の軌跡をご紹介しますと、昭和63年から平成3年までは、「町内会連合会」という名称になっています。それぞれ100世帯ずつくらいが一つの町内でございまして、その町内会が、横並びで連合会を作っていたという状況です。平成4年から平成19年までは、「団体連絡協議会」を設立して運営をしてまいりました。28の町内会だけではなく、それぞれ学



区の中には、交通安全とか少年補導とか防犯推進とか、いろいろなテーマコミュニティと言いますか団体がございますが、それらの団体と町内会が連絡・連携し合おうという取組でございます。ゆるやかにゆるやかに、こういう学区の中の自治組織のつながりを強化していったという歴史がございます。

今日少し詳しく説明したいのが、①「紫竹文化振興会」というものの設立、それから、②地域の部活動・サークルである「紫竹ろーまんくらぶ」の設立、このような特徴的な活動をしながら、紫竹学区の住みよいまちづくりを目指しているということです。立木先生のお話にもありましたとおり、私たち紫竹学区も、ふれあいまつり「紫竹まつり」を非常に大事にしています。何のために「紫竹まつり」をするかという、ふれあい、交流、つながりを持つためにやります。ただ単に祭りをやるのではなく、祭りに向けていろんな会議をもつんですが、どんな祭りにしていこうかという会議のプロセスも非常に大事にしているというのが紫竹学区の特徴かなと思います。

まず、20回を超えた「紫竹まつり」の様子から紫竹がなぜ元気なのか、ということをご紹介できればと思います。一つ目は、立命館大学の学生チンドン屋のグループ「おとや名曲デリバリー」によるプログラムです。昔なつかしい昭和の名曲を演奏しながら、みんなで盛り上げるプログラムの一つですが、お年寄りも子どもたちも各世代が楽しめるプログラムです。2つ目は、各種団体、既存の各種団体との連携やそれぞれの力や特徴を活かすことを尊重していることです。いろんな行事をしますと、「地域女性会」の女性のパワーと言いますか、支えが非常にありがたく、動員力も素晴らしいものがあります。また、紫竹小学校との連携・結びつきも非常に強くなっています。3つ目は、他の元気な学区のまちづくりを学ぶ取組をやっていることです。京北町(現. 右京区京北地域)の皆さんと紫竹学区とのまちづくりの交流を4年間しっかり取り組みました。京北町は大阪市と同じ大きさで住民自治もしっかりしているということで、紫竹学区が学ぶところがあるだろうということです。「紫竹まつり」には京北の有名な「大杉太鼓」が演奏に来てくれています。次は、リーダーが率先垂範していくことが大事だということです。自治連の会長が、朝のパイプ椅子並べから夜の盆踊りでは先頭に立って踊っていただき、何から何まで全部率先してやっていただいています。それから、「紫竹まつり」自体が、学区の中の17の団体がちゃんと自ら TENT をそれぞれ用意して、テーマコミュニティの情報発信・啓発、模擬店を行って、自らも楽しみつつ、来場者に楽しんでもらう主催者側の役割も果たしています。

それから、最も特徴的な紫竹学区が元気な要因は、人材の活性化・発掘とかに工夫をしているということでございます。紫竹学区の地域のサークル、部活動の「紫竹ローマンクラブ」ですが、旅行クラブ、自然の山歩きのネイチャークラブ、囲碁将棋、料理クラブなども含めて12のサークルがございます。会長の発案で、団塊の世代の方々のマンパワーをどう学区の街づくりに活かすかということで、55歳から入れる規約なんですけど、約5年間、趣味の活動を通じて地域と緩やかに結びつきをつなげながら、60歳の定年後は、地域活動にどんどん活躍してもらおうという仕組でございます。この趣味の集まりである「ローマンクラブ」のメンバーから、自然発生的に「紫竹祭り」に模擬店を出展してくださるというような関係性が生まれてきております。さらには、「ローマンクラブ」の料理クラブと学区の一人暮らしの方や男性の料理教室など、学区の事業とのコラボも行われています。

最後に、まとめとして、紫竹に学ぶ「まちづくり」ということですが、立木先生のお話にもありました

が、地域防災と地域福祉が非常に大事なテーマとなります。「自助・共助・公助」という補完の原則なんです、中でも地域の自治活動では、「自助と共助」という役割を果たすのが重要です。学区のまちづくり活動って大変だなとか思われる方がほとんどかと思いますが、「楽しくやろう！」というのが紫竹のテーマで、「不真面目では受け入れられない、楽しくなければ続かない」が私たちの持論でございます。すなわち「地域活動を楽しもう」ということです。祭りをやること、夜間パトロールをやること自体が目的化するのではなく、祭りは何のためにやるのか、夜間パトは何のためにやるんだろうということを事前の会議などで確認し合っておくこと。祭りや夜間パトが目的とならないようなミーティング、理念の共有、目的の共有といったことが非常に大事かと思います。ご紹介しました、団体間の連携であるとか、人材発掘と活用、得意技を活かすという発想が「まちづくり」には非常に大事だと思っています。

立木

続いては、京滋マンション管理対策協議会・賀川雅彦さんです。マンションも一つのコミュニティと考えたときに、それをどう自治・管理するか、一つの管理組合だけではなかなか難しいので、みんなで助け合おうということで始まった組織だと思うのですが、活動について引き続きお話を頂けたらと思います。

賀川

それでは、管対協についてご説明させていただきます。立木さんの方からもご紹介がありましたとおり、マンション管理の取組をしているわけなんですけれども、少し、マンション管理という前に、もう一度皆さん思い出して頂きたいことがありますので、ちょっとご質問します。この中で、集合住宅・分譲マンションにお住まいの方举手頂けませんか……。マンションの方……。今日ご参加の方はそれほど多くないようですが、



直近のデータ、京都市が調査しました平成19年度の調査によりますと、分譲マンションが1,414棟。その戸数が8万6千戸くらいある。それが、京都市内の住居数が72万件くらいあるそうですので、約10パーセントくらいがマンションでお住まいになっているのが今の京都市内の現状です。これを踏まえて…それともう一つ。先ほどの立木先生の講演の中で、5つのキーワード・軸を教わったと思います。私どもの軸で言いますと、先ほどの5つの軸「多様な住民参加」、「イベントの活用」、「興味・愛着」、「あいさつ」、「自律力」というお話があったと思います。「自律力」、これは自治会の力、あるいは集合住宅・分譲マンションでは購入して居住者になったタイミングでその管理組合の組合員としてその管理をつかさどる、まさに私たちの取組というのは、立木先生のお言葉を借りれば、「自律力」をいかにうまく皆さんで共有し高め合って、かつ住民相互の取組を進めていくか、あるいは精度の高い管理組合を運営していくかこういうところにポイントを置いて私どもは活動しております。私どものキャッチフレーズは3つ。「楽しい管理組合をつくらう」、「住む方たちひとりひとりが賢くなりましょう」（「賢くなる」＝積極的に管理組合の中に参加し、例

えば、管理組合の規約・ルールを理解したうえで組合員としての立場を發揮すること)、「管理組合の組織を通じて、新しい地域コミュニティをつくろう」というのを掲げて、より良いマンションづくりを実現していく、そんな3つの目標をもって活動しています。管対協の設立が1981年・32年ほどになります。NPOになったのが2006年。京都でもNPO法人の草分け的な存在で、この30年、管理組合を軸とした軸のぶれない活動を展開しています。最近のデータによると、管対協の活動というのは、「京滋マンション管理対策協議会」という名が示す通り、京都、滋賀、それから大阪も一部含んでおりますが、139管理組合。戸数が16,649戸ということで、先ほど京都市内が1,414棟で8万6千戸と申し上げましたが、管理組合数にすると10パーセントくらい、戸数にすると20パーセントあるんですね。ということは、それだけ大規模なマンション管理の集合体だにご理解ください。その取組ですが、まず広報活動をやっております。機関紙「マンションLIFE」の発行、これはマンションにお住まいの方、管対協に加盟されているマンションの住民の方には全員に配布されるんですが、年4回の発行で、管対協の方針とか声明・主張、その時々タイムリーなお知らせなどを掲せています。それから、組合役員向けに定期的に「管対協通信」を出しているのと、ホームページも整備しています。もう一つは、様々な研修会やセミナーを通じて、それぞれの管理組合の相互の質を高めていく取組です。あと一つは、専門家の派遣。専門的な話になるとときには、弁護士とか一級建築士等の専門家を派遣する制度で個別の案件等も相談するというをやっています。こういったことを通して、管理組合が自らのマンションの管理を通して、管理会社や専門家の判断にゆだねるのではなく、管理組合自身で判断し、責任を負えるような管理組合の自立支援、ここを活動の目的としています。

最後になりますが、管対協は非常に多くのネットワークを持っておりますので、ここから情報を得られることが各管理組合にとっては非常に大きな収穫になりますし、管対協の強みであるということを申し上げておきます。

立木

続きまして、NPO法人子育ては親育てみのりのもり劇場、主に右京区で活躍されておられます。お立場としては、NPO法人なんですけれども、地域の自治会の方々との連携がなければ、子供たちの活動もできないということで、そういうご経験もお話いただければと思います。

伊豆田

子育ては親育てみのりのもり劇場、長い名前ですが、NPOをしています。右京区を主に活動の拠点としているんですが、どんなことをしているかと言いますと、よく子育て支援をしてはるんかな、と思われがちなんですが、「子供というのは、未来に私たちを支えてくれる子ども、結婚しなくてもしても、おじいちゃんでもおばあちゃんでも学生でもみんな親だとしよう」という考え方で、子育て支援だけではなく、様々な活動をしています。右京区で走っている「嵐電パトレイン」というパトカーの色を



塗った電車がありますが、あれは、みのりのもり劇場が地域の個人の方、行政、警察、企業の方、そういう地域にからまった皆さんにお声掛けて、「みんなで守る右京の安全」をテーマに走らせました。これが先ほど話にあったイベントの中の一つなのかもしれませんが、そこに至るまでのプロセスがつながりをつくるということで、未来の子供たちのために大人が活動するということを大切にしています。

他にも、太秦大映通商店街の私たちの事務所に手づくりでコミュニティカフェを作りまして、そこには子どもたちが集ったり、おじいちゃん、おばあちゃんなども沢山来ていただいています。塾通いの子どもたちは、コンビニで晩御飯を食べることが多いんですが、コンビニと同じぐらいの値段で食べられて、作っているおばちゃんと子どもが「なんや今日も塾か〜」というような、昔のスーパーマーケットのお好み焼きとか食べるところみたいな思いで作りはじめたカフェです。

それから、地元の野菜で、干し物をあまり食べない今の子どもたちのために、干物はそのままでも食べられ、味が濃くおいしいということをお母さんに教えて、噛むという力を育むという取組もしています。あとは、右京区(京北)が納豆発祥の地ということから「納豆アイス」を作ったり、子どもにほんまもんを体験させようということで、「いただきます」を言わない最近の子どもに「いただきます」を体験させようということで、魚を放して、鯉をさばいて、自分たちでお味噌汁を作って食べるという体験をさせたり、本当に様々な活動をしています。一番最近始めたのが、「地域の魅力を地域がもっと知ろう」ということで、「歩歩歩(ぽぽぽ)クラブ」というノルディックウォークを使って地域を歩くこと、年齢関係なく子供も大人も楽しく歩くということを始めました。先ほどもおっしゃったように「わくわくは力だ」ということで、地域の元気を作っていくって、継続的な事業にしていくというNPO活動をしています。あとは、フリーペーパーの「右京じかん」、今回はお風呂特集ですけど、普通のフリーペーパーと違って、地域の頑張っている人が主役という見せ方をしています。このフリーペーパーがめっちゃめちゃ人気で、1万部刷るんですけど、あつという間になくなってしまふ。そういった、情報を発信するということを要にしながら活動をしています。

立木

これまでのお話が、地域、マンションの管理組合と漢字が多く出てきましたが、みのりのもり劇場あたりからは、パトレインとかコミュニティカフェとかカタカナが増えてきました。

京都の中でNPOという団体がたくさん設立されてきています。一つ一つのNPOは小さい団体だがそこをうまく団体として支援する、中間支援と言うんですけども、そういうNPO団体を顧客にした中間支援組織としては日本の中では草分けに近い組織で、京都が誇りを持てる組織の一つです。「きょうとNPOセンター」の西田さんから、そもそもNPOとはというお話から、よろしく願います。

西田

西田でございます。私が今勤めております「きょうとNPOセンター」という団体と、そもそもNPOとは何かということをお話しさせていただきます。一方で、地域で消防団に入ってちょうど1年目なんですけど、会場に自治連会長が来られてますので少々緊張しております。

立木

消防団をやりながら NPO のこともやられている、いいですねえ。こういうハイブリッドな方がいるのも京都のいいところかなあと思いますね。

西田

皆さんNPOというのはご存じでしょうか？そもそもNPOとは何かということを簡単にお話させて頂ければと思います。京都というのは、市民の皆さんが自らまちをより良くしていこうという思いを持って、グループを作って活動されているというのが非常に活発な地域なんです。例えば、独居のお年寄りへの配食のお弁当、お弁当を配るだけじゃなくてちょっとお話も聞こうか、というグループを作るであるとか、あと、今日終わったらぜひお隣のコーナーに行ってみて頂ければと思いますが、ipad やスマートフォンを使って自ら情報を仕入れていこう、そういったことを学びながらお孫さんとの通信や社会の情報を楽しくやっっていこうと取り組んでおられるグループ。また最近では、ウォーキングで、京都の史跡なんかを回りながらみんなで歩くことで生きがいづくりや京都の歴史を学んでいこうというような形で、市民のみなさんが地域という枠にこだわらず、目的やテーマを決めて一緒に何かをやっていながら自分たちが健康になっていこう、地域をより良くしていこう、社会を元気にしていこう、という風に集まっている団体のことを実はNPOという言い方をしているということなんです。この「きょうとNPOセンター」というのは1998年に出来たんですが、当時もそういった活動をしておられる方はたくさんいらっしゃったんですが、活動を上手いことやっっていくためにどうやったらいいのかとかというご相談であったり、どうやって活動を作っっていこうか、横に寄り添いながら一緒に作っっていく、そういう応援をしていこうということのできた組織が「きょうとNPOセンター」です。最近では、NPO の応援だけではなく、先ほど伊豆田さんからお話がありました嵐電の「パトトレイン」のような、地元の中小企業さん、行政さん、地域の団体さんも一緒に手を組みながら、つながりながら活動していくことを応援させていただいたり、また、地元の商店さんと NPO が手を組んでもっと元気になるような商売のかたちや動きを作れへんか、といったシンポジウムや、いわゆる田舎で、人口が減って高齢化している地域の活性化に取り組んでいる NPO の事例と一緒に考えるシンポジウムなどを開催したりもしています。そういう風にNPOの活動のお手伝いをしている団体ということです。

立木

4人それぞれにお話をしていただいたんですが、その中で共通するポイントがいくつかあったと思います。時間の都合ありますので、その中で一番大事だと思うのが、多様な人たちが緩やかにつながると大きなことができるんだ、というのが一つのテーマだと思います。それを進めるにはどうしたらいいのか、ということでもそれぞれお聞きしてみたいと思います。

まず片山さんのところは、テーマ型コミュニティと



地域の色々な団体、役員の方々とをうまく巻き込むには緩やかなつながりをしたり、イベントが大事だというお話をされていたんですけど、中でも地域の中の多様なサークルと、テーマ型コミュニティと呼ばれるそれぞれの役割機能を担った団体と、それからもっと全般に地域のことを考えている自治会、これを緩やかにつないでいる、これをキーワード、ひと言で表すとしたら何が大事なことになるでしょうか。

片山

まつりの準備の会議で、今先生がおっしゃられたことを探りながら話し合うことがあります。「楽しみながら競い合う」というのが一つのキーワードかなと思っています。紫竹まつりのプログラムの中に、学区の中の28町内対抗で、「ごみ減量オリンピック」という分別の正確さとスピードを競い合う楽しいステージイベントがありますが、優勝をねらう町内は、紫竹まつりの前月の8月の中旬の地蔵盆の頃から特訓をされるらしいんです。子どもたちもわいわい楽しそうに盛り上がった形で町内で競い合う。そこにさらにごみ減量に詳しいママたちが参加するというような仕掛けをしたりしています。

立木

ありがとうございます。「楽しむ」に加えて「競う」というのが、みんなを共通のところへ向かわせる力があるんじゃないかなと聴いていて思ったんですが、賀川さんのところも、うまく皆さんをつないでいくというお仕事でもあります。この場合には、何が決め手になるのでしょうか、原動力は。

賀川

一つは、「課題の共有化」、ここが非常に大事だと思います。各管理組合それぞれ歴史もありますし、文化も考え方も違う中で、管理組合を自主運営していく上での共通課題を捉えて、それをお互いに勉強して習得して、それを各管理組合に落とし込んでいきましょう、そういうプロセス・スキームでやるのが一つの手順だと思います。

立木

その時に、進んでいる組合、遅れている組合、管理組合同士で切磋琢磨みたいなものは起こるのですか？

賀川

もちろんです。非常に進んだ取組をされているところの具体例を申し上げますと、京都市の「地域活動ハンドブック」にも掲載されている伏見区の「ファミリー伏見」さん。こちらは管対協の会員さんでもありますし、非常に進んだ先進的な取組を常にされているところで、管対協ではそういった先進的な取組をされているところをぜひ取り入れて、自分たちに置き換えてどうしていくか、逆に進んでないところについては、なぜ進んでないかという「課題の共有化」というものをおこなっております。

立木

ありがとうございます。同じようなことを伊豆田さんのところも、嵐電「パトレイン」の取組一つ見ても、警察、事業者、地域の大人たちも関わらないといけない、すごい取組をされているんですけど、みんながうまく、緩やかにつながっている感じがして、この原動力は何なんでしょうか。

伊豆田

私たちのNPOの設立は、「自然幼稚園」という幼稚園のPTAのお母さんの集まりなんです。体験が知力の源であるとか、やんちゃな子供の方が面白いとかいう育て方を考えているお母さん方、今は学生も男性もみのりのもりの中には入っておられるんですが、そういった中で、地域の人たちよりも私たちの方が先に走ってやったとしても、ちょっと違う気がして、そうではなくて、嵐電「パトレイン」も、交通安全推進などをされている地元の方の元気を応援するという、そちらの立場でその人たちがワクワクする仕掛けをつくるという立場でやっていくと、なんとなく上手に主役を時には照明さん、時には役者、その立場を私たちがいいでしょと思ってあげれるという考え方なんです。嵐電「パトレイン」に関しては、今ある自治会の会長さんや地域でやっている方々を主役にする役目を私たちが担っているというのが成功の一つかなと思います。今は商店街でも理事をさせて頂いているんですが、今度大映通商店街に「大魔神」の像を置くんです。そういうことで昔を懐かしむだけじゃなくて、民謡みたいに昔話を子どもに聴かせてあげられるようなきっかけができればいいなと、あくまでも私たちが前にでるのではなく、今は商店街を主役に、お手伝いをするような立場の活動をしてるからかなと思います。

立木

聴いていると「ワクワク」というのが一つのキーワードな気がしますが、「こんなことが昔地域であったんや」とか、「それ面白いやないか」とか、そしてそれにみんなが「関わっていききたいな」、というような感じなんですかね。

伊豆田

そういう風にもっていくということ、「ここに5mの大魔神が来たらうれしいよね」と、みんながワクワクするきっかけを一つの行動の源にすること。

立木

おもしろいですね。未来を具体的なイメージで捉えているんですね。そういう未来に向かったら私らも色々協力できるわ、そういうもんなんですね。

西田さんのお仕事は、言わば、NPOの世界の人たちをうまくつなげるというのがメインのお仕事だったと思いますが、それをつなげる原動力はどんなことになりますか。

西田

つなげることを目的にすると何事もしんどくなってしまうんですが、例えば、ここにこういう地域の課

題があって非常に困っているという話をしたときに、よくよく調べると実は課題じゃなかったりするんですね。地域の高齢化率が非常に高い、これは課題だ、でもよくよく調べると地域に元気なお年寄りがたくさんいる、時間を持って余している、ひょっとしたらその人材の資源を使ってもっと楽しいことができるんじゃないか、生きがいつくりのノウハウ持ってる人がいる、年金プラスでちょっとお金をもらえるような仕組みを作るか、つながりとか絆が少ないようであれば何かそれを事業にしていくような地域の資源があるんじゃないか、そういう風に課題を突き詰めていくと、立木さんがおっしゃった「ワクワク感」とか「やったらおもしろいで」とか、最終的には「動けば変わっていくよね」というイメージができるのかなど。そういうところが、何かいっしょにやっっていこうかなと思える原動力かと思います。

立木

4人それぞれ違うことを語っているようで、似たようなことを言っています。もしかしたらキーワードになるのは「共通の課題」。これは片山さんがおっしゃった言葉ですけども、まさしく課題の共有化こそが私の仕事だとおっしゃったのが賀川さん。それを別の言い方で、「ワクワクする未来」そう皆に思ってもらうことで自然とそれに楽しみながら参加してもらおうということを語ったのが伊豆田さん。西田さんは、NPOの世界ではそれぞれ団体組織のミッション・使命がすごく大事だということですけど、ミッション・使命って何かといえば、ちょっと先にはこんなワクワクする未来になっているというのが視覚的にイメージできることが、もしかしたらミッションを共有することの本当の意味ではないかということが出てきたのではないかと思います。どうでしょうか晃瓶さん。

晃瓶

おっしゃってることは皆共通してるなって思います。僕が一番思うのは、昔は近所のオッチャンで、おっちょこちよいのイチビリのオッチャンやおばちゃんがいたでしょ。「こんなしたら笑われるんじゃないかな、変に思われるんじゃないかな」とか、良い意味での日本人の奥ゆかしさで、どんどん静かになってしまって、でもやはりそういう人は必要なんですよ。うるさいことは言うけども良いこともいっぱい言う、そういう役割を今NPOの皆さん方がちゃんとした理論でやっておられるんだなということがすごい分かりました。



立木

地域活動を活性化するとき「三者(さんもの)がいる」というんです。片山さんのところで言うと、立命館の学生さん、これは地域から見たら「よそ者」でもあるし「若者」でもあります。でも「よそ者」とか「若者」が地域で活躍できるためには3番目の「者」が必要で、それが、晃瓶さんがおっしゃっている「バカ者」というやつです。この三者「よそ者・若者・バカ者」がうまく出会うことによって、「ワクワクする未来」が起こるぞ、それが何となくみんなを目標に向かわせる、こうすることで私たちが連携・協調できるというお話なのかなと思います。では、「ワクワクする未来」をみんなが共有化できるよう

にするための前提条件というのは何なのか、そもそも「ええやんそれ」と色んな人がその話に乗ってきてくれるための、その前提って何なんでしょうね？

伊豆田

私が考えるキーワードは、「子ども」だと思います。子供たちが楽しいであろうことをみんなでやる、そのプロセス・段階が子供たちのためであって、子供たちが喜んでくれて、その姿を見れる幸せ感を皆が共通に考えて何かやる、結局は全部つながるんですが、そう思います。

片山

今の伊豆田さんの話につながるんですが、地域・学区のまちづくりにおいて言うと、「理念の共有」要するに「メッセージ」です。3年前の紫竹学区の夏祭りで、自治連の会長が「紫竹学区を住みよい街ナンバーワンにしたい！」と挨拶をされたんです。それがすごく他のみんなにも響きまして、防犯活動、少年補導、保健協議会、体振とかそれぞれ活動内容は違うけれども、「住みよいまち紫竹」をつくるための色々なアプローチなんだということで、会長のメッセージによって目標が共有できたということがあります。それで、学校の子供達や学区の住民の方からもメッセージを募るようになり、メッセージのコンテストをするようになりました。まちづくりの目標の共有を分かりやすく伝えるようなことをやっています。

立木

「未来の共有」、「理念の共有」ができる前提とはなんでしょうね。

片山

紫竹で言えば、15年ぐらいの序章期間があったけれど、各町内会だけの横の並列、各種団体の横の並列だけではなく、これからの地域福祉、地域防災を考えると、そういう地域の自治連合会が必要だということはずっと温めながらやってこられて「自治連合会」が設立できた。そのつながりが少し感じとれてきたからこそ会長の発言になったんだと思います。

立木

伊豆田さんは、「子ども」とおっしゃいましたが、それはわが子ではなく、地域の中の子どもがワイワイ・ガヤガヤやれるということですね。

伊豆田

なおかつ、「やったげる」ではあかんです。子どもたちは「やられる」ことに慣れていて、「つぎ何してくれるの？」ではなく、それを大人たちが楽しむ姿を見せるというのがキーワードです。

立木

我が事としてこんなのが見たい、と楽しむということですね。紫竹学区も長い序章期間があって、

みんなが我が事としてこの学区では自治連がいるんじゃないかという土壌がある中で、「ワクワクする未来」をきれいな言葉、メッセージで出されたときに皆が連携した。西田さんいかがですか。

西田

私自身ワクワクするためには、分析するっていうのが非常に重要だと思うんです。色々な課題をよく相談されますが、その課題は本当に課題なのかということが実はあつたりします。「よそ者・若者・バカ者」がなんですごいかというと、そういう人の意見を聞くと、思い込んでたなと気づき、問い直してみると、本当の課題はこれやったんやと分って、ではこれについてどうやったら楽しいことできるんだらうかと考え始めたときに「ワクワク感」がでるんじゃないかと思いました。

立木

「我が事」と思えることについて光が灯ったら、それが「ワクワクする未来」になる。だけど、みんなが同じように地域の課題を我が事と思っているかどうかについては、実は冷静な分析とか状況認識とか、それが皆の中で統一されているのか、そういう現実があつたとき、心に灯をともし具体的な言葉、「おもしろいやないか」と心に火を灯すような「ワクワクする未来」をうまくつかめる言葉をわれわれが持てるか、それによって、指図しなくても関係者はみんな動いてくれるんや、ということが今日のお話の中で一つの共通のテーマとして出てきたように思います。立場の違う人が出会って、色々な市民の方にお越し頂いて、その気持ちの上でのキャッチボールの中で、皆さんがうなずいてくださったり、今日はいい会ができたように思います。今日は初めての取組でしたが、大成功だったように思います。長帳場でしたが、ありがとうございました。



(終了)